

令和5年度
横山利弘先生を囲む道德教育東京勉強会（報告）

杉並区立向陽中学校

池田 和幸

第1回勉強会 5月20日（土）参加者25人（ズームと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物教材「吾一と京三」（あかつき教育図書より活用した深い学びのある授業づくり

【進め方】（第2回以降も同様）

- ① 全体会（参加者自己紹介、道德教育に関わる質問等と横山先生による解説）
- ② グループに分かれた資料検討。
- ③ 全体協議会（グループ討議の報告と横山先生による指導・助言他）

【全体会及び協議会より】

○真の友情について

→愛はエロス、アガペー、フィリアがある。友愛はフィリア。対等の関係から、はぐくんでいく愛が友情である。相手のとの関係が高貴であったり、与える関係であったりすることなく、対等の存在として関わっていくところに、友情がはぐくまれていくことについて理解しておく

○「吾一と京三」で考える視点

→吾一と京三の人間関係は、最近の子供たちの中には少ない関係性かもしれないが、単純な友情というとらえをするのではなく、義の世界であるということに着目して指導すると、友達同士の人間関係のあり方として、子供たちの中に違った視点をもたせることができるのではない。時代が違うという面もあるが、「義侠心」について考えを深めさせながら、真の友情について迫らせていきたい。

第2回勉強会 7月15日（土）参加者23人（ズームと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物教材「古びた目覚まし時計」（文部省道德教育推進資料第1集）を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○節度と節制について

→節度というのは、欲望は衝動のまま行動し、心身の不調につながるようなことにならないよう、適度な程度である。節制というのは、その節度を超えないように自己を制御することを節制という。古代ギリシアでは、四元徳として「節制」が位置づけられ、大切にされてきた。節度、節制というと、制限するという意味でマイナスにとらえられがちであるが、朱子学において「中庸」が重要な概念としてとらえられているように、ほどほどにということが大切だということを理解しておく。

○「古びた目覚まし時計」を考える視点

→節度、節制の授業ともなると、教師が主導的に価値を教え込みがちになるという部分があるので、主人公の思いに着目させ、父親がどうしてそこまで思うようになったのかについて考えさせながら、主人公によりそった授業にしたい。

第3回勉強会 9月16日(土)参加者26人(ズームと対面によるハイブリッド型勉強会)

【課題】 読み物資料「一冊のノート」(文部省道徳教育推進資料集第4集)を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○本来的自己への目覚め

→実存哲学的にとらえると、普段私たちは非本来的自己を生きている。実存的な目覚めのきっかけをつかみ、本来的自己への目覚めが得られる。道徳の教材に本来的自己への目覚めまで記載されているものは多くはないかもしれないが、本来的自己への目覚めについて問うていくという部分に、自己の建設につながる授業ができるようになるのではないか。

○「一冊のノート」を考える視点

→これまで、草を引き終わったところでおばあちゃんにどう話しかけるかという展開が多かったが、そこはすでに本来的自己を取り戻していると考えられるので、本来的自己を取り戻した瞬間は、にじんだインクを見た場面になる。そこで問いを構成していくことで、これまでと違った道徳の授業が構築していけるのではないか。

第4回勉強会 11月18日(土)参加者31人(ズームと対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物教材「やりがんなー西岡常一」(あかつき教育図書)を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○ローテーション道徳について

→以前の道徳の時間の指導は、担任が1つの教材を1回だけ行うことが前提であったので、教材を使いこなせず、内容を深められないことも多かった。そこで、ローテーション道徳が取り入れられたが、中には、ただ単に、道徳の授業を手分けして行うことが目的となり、指導力を高めることに役立っていないことも見られる。本来は、同じ教材を複数のクラスで扱うことで、自分の授業を毎回振り返ることになり、教材を使いこなす力がつくようになることが期待されている。また、一つのクラスにいろいろな先生がかかわることで、生徒の様子を様々な角度からみとることになるので、より客観的な評価をすることにも役立つ方法である。

○「やりがんな」を考える視点

→西岡常一氏のすごさは、様々な文献からわかるが、法隆寺を修復するためには、道具の形や道具そのものを再現していくだけではなく、その当時の材、鉄を入手してまで再現するというすさまじさがある。伝統文化を守るということはどういうことなのか、一言では言い表せないが、真理の探究、勤労や公共の精神などとも道徳的価値が絡み合っている。実感をもって考えさせることは難しいが、西岡氏のすごさについて、生徒とともに考えていくことから、西岡氏の思いを支えている部分について焦点化していけるとよい。

第5回勉強会 令和6年1月20日(土)参加者23人(ズームと対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物教材「ほっちゃれ」（あかつき教育図書）を活用した深い学びのある授業づくり

【全体会及び協議会より】

○感動、畏敬の念について

→美しいものを見たり、触れたりすると心が震える、カントは美しいものと崇高なものは意にかなうものだとしている。美しさというのも外見の美醜ではなく、内面の美しさというものをとらえて考えることがある。ほっちゃれの鮭もぼろぼろだけど、そこまで生きる命をつなぐ姿に美しさを見ることができたのではないか。畏敬は崇敬と恐怖が合わさったもの。対象に近づくことができない物怖じの感情がある。ただの恐怖とは違う、自分の近くにいるからこそ、畏敬の感情が芽生える。

○「ほっちゃれ」を考える視点

→映像などで、生徒は北海道の鮭の産卵シーンなどを見ることができ、イメージを膨らませることはできる。この作者が伝えたかった畏敬の念について、しっかり考えさせる手がかりとしては、作者が鮭を手にとって、そこで息絶える部分についてどう考えさせていくかで変わってくる。思わず手に取りたくなるくらいのおしさ、そこが近寄りたけれど近くに感じていたい、恐怖とはそこが異なる。

第6回勉強会 3月16日（土）参加者68人（ズームと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物教材「月明かりで見送った夜汽車」（あかつき教育図書）を活用した深い学びのある授業づくり

【講演及び協議会より】

○存在の建設について

→自由を根拠として、その判断のもととなるのが道徳であり、規範の総体としての道徳という考え方よりも、学習指導要領が示す道徳科の目標は、存在の建設として考えた方がふさわしい。大谷昇平が、「優勝に欠かせない存在であったと言われたい」と述べたように、自己の存在の建設を私たちは行ってきており、人間としての生き方を考えるということは、存在の建設をしていることである。存在の建設という視点で道徳科の授業を見つめ直していく必要がある。

○「月明かりで見送った夜汽車」を考える視点

→場が道徳的に高まる教材として授業を行ってきた先生が多いが、存在の建設という視点で考えると、人に焦点をあてて考えていく展開も考えられる。電気を消し、放送を行った先生、国体にいく先生、見送っている私、それぞれの立場において考えていくことができるのではない。今後よりよい実践が出てくることを期待している。

<令和5年度の勉強会を振り返って>

令和5年度は、読み物教材の活用した深い学びのある授業づくりをテーマとして年間6回の勉強会を重ねてきた。第6回の勉強会では、横山道徳教育研究所と共催で、研究所のオープンセミナーとして実施した。普段よりもおさらに全国各地から参加者が集まり、様々な意見交換が行われることがなった。道徳が教科化され、その直前はとても熱が高かった

が、熱した分現在は現場の道徳に対する熱が冷めてしまっている現状の中で、多くの先生方が道徳の授業について、熱い心をもっていることがわかった。

教科書が使われるようになり、使えない教材の使用に制限がかかるようになり、会で取り上げられる教材の幅が狭くなっていることで、教材選定が難しくなってきた。今後は優れた教材を開発していくなど、新たな教材発掘が課題となってきた。

いずれにしても、道徳科の授業においては、道徳科の目標に迫ることが大切であり、そのためには、どうすれば深い学びになるのか、今後も勉強を重ねていきたい。